

《書評》

アルフレッド・シュッツ著 佐藤嘉一訳

『社会的世界の意味構成（新訳版）』

——理解社会学入門——

（木鐸社、二〇〇六年、A5版、三八六頁、五〇〇〇円＋税）

森元孝

シュッツ研究の新たな源泉

アルフレッド・シュッツ記念アカデミーのひとつがあるドイツ、コンスタンツ大学の大学出版会から『アルフレッド・シュッツ全集』が刊行されているが、本訳書原本も新版として二〇〇四年に出版された（Göteborg, 2004）。一九三三年グライプシュタットのシュッツ・シュッツ・シュッツ出版社の原書と内容に變化はないが、ルツクメンとスバルバール¹の流れから生まれ出た俊才たちでミチン・エントリスとヨアヒム・レンによる解説と評注が加えられ、この書をめぐる息の長い研究が精密に続いていることがわかる。

佐藤嘉一先生による今回の改訳は、この全集刊行と直接に関係はしていないであらうが、日本語でのシュッツ研究を進める際にも、また今回新たに「理解社会学入門」と副題が原著に近い意味で訳されたことでも、これが理論社会学の主要問題を学ぶ際に重要な寄与をするものであることは間違いない。

前訳書では副題は「ヴェーバー社会学の現象学的分析」とあったが、今回改められた。この点のみならず、「改訳版序」として十頁にわたって訳語の異同等について佐藤先生自身の説明が付されている。

翻訳は、ときに命を賭して取り組みねばならない大事業である。とりわけ、原著のようにその後の社会学理論の趨勢に大きな影響を与えることになった著作の翻訳、とりわけ日本語への訳出は神経をすり減らし、かつ膨大な時間を要する作業である。哲学者広松渉による、言わばシュッツ原著へのコメント「ルのような著作（広松 一九九一）との関連においても、また日本のシュッツ紹介者・信奉者たちからも、前訳書の訳語について異論と指摘があったことはたしかである。

しかしながら、私がつねに思い続けていることであるが、残念なことにシュッツの巧みなレトリックを、そのまま日本語に訳すことは不可能であり、これは今後も変わらない。もちろん佐藤先生も十分そのことを承知であり、素朴な「訳語指摘」を逐一行うことの意味は少ない。今回の改訳も、精確な邦訳最終版の完成というよりも、むしろシュッツの原著を精密に読解するための新たな重要な橋頭堡提供であると考えたい。したがって、前訳書も今後のシュッツ研究の際の大きな手がかりであり続けるということである。

ドイツ語に習熟した若手社会学者が消え行く現在を考えれば、今回の改訳版は、初訳版とともに、また広松渉のコメント「大

フアラテイズムとの関係
もちろん主観的意味という問題とシュッツとの関係を解消せよというのではない。しばしば主観主義の社会学とされてきたシュッツの社会学であるが、問題は、こうしたフアラテイズムの定義を同格的に引き継いで読もうとしてきたことに由来している

では解消 (eliminate) されていると読まねばならない。
い、おきまりの主観的意味付与論は、むしろシュッツにおいて、いわゆる「行為者が主観的に意味を八付与する」とその帰納的構造を明瞭に示したところにシュッツの重大な貢献「Habermas」の関係が明示しているように、行為の反省的連鎖、そこに端を発してはいけるとされるが、すでに「Habermas」と本書は、フアラテイズムによる社会的行為の定義に直接かわり、読もうとすることはやめたほうがよいと言いたい。シュッツの社会科学界に出来上がったフアラテイズム像を重ねて、シュッツを必ずしも非難するつもりはないが、今となっては、戦後日本の翻訳が反訳作業である限り、この種の知的反発による意識争にかかわるイデオロギー性を感じさせます。
of the Social World」ともなっており、これもひとつの理論論際、これよりも前「一九六七年度の訳書は『The Phenomenology of the Social World』と対照するに適切な副題であった。実のフアラテイズムを糾合するに適切な副題であった。実とフアラテイズムにはめくまれる時代にあつたことを思えば、多くフアラテイズム経由のフアラテイズム、いや社会学がすべてフアラテイズムに先行する五年あまりを思えば、フアラテイズム絶頂期であり、フアラテイズムを糾合するに適切な副題であった。実とフアラテイズムにはめくまれる時代にあつたことを思えば、多くフアラテイズムに先行する五年あまりを思えば、フアラテイズム絶頂期であり、

行為と世界
佐藤先生「自身の『改訂版序』にあるとおり、シュッツは「Habermas」と「Habermas」とを明確に区別している。こうした区別は、フアラテイズムにおいて「action」と「act」として可能な区別であり、行為論が理論でありながら、こうしたトリックに文えられるものであるということを知る必要がある。こうした区別は、ヨーロッパ語の巧みな表現能力に内在するものである。しかも、この表現上の差異が理論上の本質的差異を示すものであることを考えれば、両者ともただ「行為」とだけ訳すだけでは、その意味は不明となるし、工夫してなされてきたように「結果行為」と「過程行為」の区別として、語を補足して訳さなければならぬ」と、これはまさに無稽の極みとさえ言われてもしかたがないところがある。
佐藤先生は「達成的行為」「遂行的行為」と訳語を与えられているが、これと残念ながら無稽ではあるが、これも訳者の責任ではなく、日本語の責任だということである。
さらに英語、フアラテイズムにはないが、ドイツ語には特有にある前綴りの区別も、そもそもは直観的に習得している分節化を、補足して訳すという不細工をせねばならなくなる。「Z」」「E」」「M」」「V」などのそれらは、それ自体で方向性を理解させる徴であるが、これを日本語では取って補って訳すこ

学出版会版の原著新訳を精密に読み解くための重要な資料として捉えることに意味がある。

点である。それだけフアラテイズムのフアラテイズムが多かったのである。本原書においてすでにそうであるが、そしてまた渡米後の業績でもある「シュッツ著者集」との関係でシュッツを見ながら、シュッツの遺作でもあり本原書の拡張された再編書でもある『生活世界の諸構造』で展開されているとおり、シュッツの理論は、行為の意味についての主観的意味付与理論というよりも、その状況産出論あるいは構成論であり、いわゆる意識論や主観主義のフアラテイズム・タインによって、時間論と空間論に交換しながら社会構成の理論を抽出するものだというところである。
本原書第一章の予備考察でフアラテイズムの社会的行為論を主題とすることが宣揚されたのち、第二章、いわゆるベルクソンの貢献、そしてフアラテイズムの内的時間意識の現象学を、社会科学に持ち込むという壮大な試みは、フアラテイズムとフアラテイズムに無視された行為の時間性への問いであり、フアラテイズムによってシステム論のフアラテイズムで受け継がれていくことになる、重要な問題の意が始まる。本改訳書によれば「各自の持続における有意味的体験の構成」、前訳書では「自己自身の持続における有意味的な体験の構成」となっており、異同がある。前訳書は英訳版の訳語を思わせるが、本改訳書は、本原書の直訳を採用しているように見える。意識が直訳の問題でもあるが、この論判は難しい。
内的持続とは何かという問題となる。これを包み持つ独立単体の自我が先に存立している」と読むと、おそらくシュッツの

とにならざるをえない。「Zweck」は、「配意」から「注意作用」に今回改められたが、私の語感からは前訳のほうがよかったのかもしないと思えるのも、日本語の語感をドイツ語のそれとは別様を持つからであらう。
シュッツ原著の最重要章である第四章で展開されている有名な社会的世界の類型区分論で用いられる、「Zweck」、「Zweck」、「Zweck」そして「Zweck」などは、これまでも片仮名表記で渡さうとした例もあるほど、訳せば無稽となる代物である。今回、後ろ「同時世界」から「同時世界」界、「前世界」から「先代世界」、「後世界」から「後代世界」と改められたが、もうすでに前の訳語に馴れた世代にある私としては、かえって違和感を抱くことになった。
しかしながら、訳語の異同よりもっと重要な点は、こうしたシュッツの区分が教えてくれる、世界に組み込まれた時間性の存在である。時間性の構造を行為とともに明瞭に理論化する（とができたのは、シュッツの重要な貢献であり、フアラテイズムにより現在に受け継がれている考え方である。その意味でも本書は、社会学の理論書における金字塔であり続ける。敢えて言えば、この種の時間性の問題は、フアラテイズムからフアラテイズムへの理論史の成果には現われ出ないものだからである。
フアラテイズムとの関係
すでに述べたとおり副題が改められている。前訳書が出た一九八二年当時、そしてその邦訳作業に取り組みしていた、それ

そしてとりわけ第一次世界大戦後、急速に都市化する社会へと変貌していく現象を読み解くための種々の部品（例えば先述の有名な社会的世界の類型区分論）を、その配置図法とともに提示するものであることも付け加えておかなければならない。本原書は、ジンメル都市論のような、それそのものを取り扱うというのではなく、一般方法論の書であるが、すでに容貌しつつあったヨーロッパの都市空間を十分に自覚したシュッツの主題化を読み取ることは難しくない。体験や行為の反省的・回帰的連関の構造、さらにその根底に見える時間性の構造、それらの高度に抽象的な理論装置にもかかわらず、同時性・眼差し・隣人（Zitgenoss）などの諸概念と、シュッツが好み例示する人間類型である郵便配達人、鉄道員などが、たんなる個然に關係しているのではないということである。同時代にペーヴが『都市』で主題化した問題と類似の関心を読み取ることができるはずである。

シュッツ研究は、二〇〇七年九月に故郷ウィーンにおいて原著出版七五周年を記念した国際会議「アルフレート・シュッツと解釈学（Alfred Schütz und die Hermeneutik: Internationale Tagung, 18.-21. September 2007, Institut für die Wissenschaften vom Menschen, Wien）が開催され、ヨーロッパ、アメリカ、日本の研究者を集め、きわめて質の高い水準にまで引き上げられた。原書探求はさらに活発に継続されていく音楽、正確にはボエジヲを想定していただくことを思い起こしつつ

構想を読み違えることになる。内的持続という体験流の反省体として現れ出る自我の析出という問題は、社会学の行為論において、そしてヴェーバーにおいてすでにそうであるが、「行為論」のアナリオリな存立という無垢な前提、すでに解体している」と読む必要がある。いわゆる方法論的个人主義という意味での主観主義・主体主義は、シュッツにおいてはすでに遠い昔に克服されている。ざりとて、原語の「in der eigenen Dasein」をわかり易い日本語に翻訳することは難しい。この点では、現訳書は前訳書とやはり合わせて読まねばならないのかもしれない。

この解題の問題については、とくにコンスタンツ大学出版会版の全集で間もなく公刊される初期シュッツの業績以来続いている発想、すなわち社会科学の基礎に、シュッツが早くから音楽、正確には初期ニチエ流のボエジヲを考えていた点を知らねばならない。この点は、部分的にはフランクフルトから離脱する、シュッツ独特の立場である（Schütz 2008）。

広松渉のコメントも「ブルクソン時代」としてまとめられてきた初期草稿の位置づけを引き継いでいるが、シュッツは、すでに一九二〇年代に、この点について実はもっと根本的なところにまでさかのぼり構想していたことが知られている。その点では本原書は、シュッツ全体の業績の流れからは多少、逸脱したところにあると言わなければならない。そのため第二章は、それ以前の諸草稿の中に蓄積されていた身体の機能連関論などの重要な問題には、いっさい触れられないままになって

いるのである。しばしば、ヴェーバーからシュッツという読み方をすることが教科書的となってきたが、このいわゆるブルクソン時代の諸草稿にある身体感覚論、身体の機能連関論を知られば、シュッツがヴェーバーに主観的に結びつけて、まさしく意味付与的に読むことに今やその正当性は乏しい。もっと遡って思想系譜を知った上で、シュッツの業績を評価できるようにする必要がある。本原書が、シュッツ自身の業績の流れから逸脱しているという点は、当時のシュッツが置かれていた関心に強く関係している。とりわけ第五章を読むと、ミースェスとケルゼンというシュッツの先生筋の社会科学への理論的寄与を主題化していること、そしてそのために第二章から第四章への編成であることがわかる。すなわち、ヴェーバーに対して、ボスト・ヴェーバーの世代のミースェスとケルゼンの社会理論を、行為論により位置づけ直すこと、しかもその行為論は、ヴェーバーの社会的行為論をそのまま引き継ぐものではなく、前述の行為の哲学的基礎のもとに彫琢され直したものであるという点にシュッツのオリジナリティを知らねばならない。

社会学の現象学的アクチュアリテへの変換

ミースェスやケルゼンの位置づけが、とりまなおさずシュッツらが置かれていた戦間期ウィーン政治風土と直接関係していることは、かつて詳細に論じたことがあるので（森 一九九五）、ここでは控えるが、今ひとたび本原書が二十世紀に入っ

文献

- 今を読み解く重要な理論が、シュッツの業績にあることを繰り返し返しておきたい。
- シュッツについては、すでに研究がし尽くされたというのではなく、ようやくその全体の原的な構成が明らかになったという時であり、今回の改訳が、今後の知的活動に大いに寄与することを期待し、また永年にわたり日本とシュッツとの結びつきに貢献してきた佐藤先生には、心より敬意を表さねばならない。
- 私事であるが、筆者の日本社会学会大会スピーチは、一九八二年神戸大学大会における佐藤先生司会の部会であった。
- 広松 渉 一九九一 『現象学的社会学の祖型』青土社。
- 森 元孝 一九九五 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論。
- Schütz, A. 2004 *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie* (Alfred Schütz Werk Ausgabe, Band II, hrsg. Martin Endreß, Joachim Renn).
- Schütz, A. 2008 *Schriften zur Phänomenologie der Musik* (Alfred Schütz Werk Ausgabe, Band VII, hrsg. Richard Grathoff, Hans Georg Soeffner, Ilja Sribar, Andreas C. Glascheit).
- (もり) もとだか・早稲田大学文学部教授